

対人認知によりコミュニケーション手段の広がりを獲得した症例

言語聴覚士学科

【はじめに】

他者への関心が薄く、言語・コミュニケーション面に遅れをもつ自閉症スペクトラム児を評価・訓練をする機会を得た。2018年4月21日～6月30日の計7回にわたる訓練結果について以下に報告する。

【症例紹介】

4歳男児。医学的診断名は自閉症スペクトラム。療育手帳 B2 で、主訴は、母親より「言葉の表出がない」であった。

【初期評価】

言語・コミュニケーション面：

（理解）単語レベルでも理解困難な場合が殆どであるが、視覚的情報を併せると理解が得られやすい。

（表出）有意味語、意図的発声はなく、意図の伝達手段は、視線が中心である。

社会性・対人面：学生の声かけへの応答がなく、一人遊びが中心で、共同注視は成立しない。

運動面：粗大・巧緻運動に目立った拙劣さはない。

感覚面：視覚優位であり、視覚的变化のある遊びを好む。聴覚に過敏さがあり、嫌いな音に対して両耳を両手で塞ぐ。触覚、前庭覚、固有覚に目立った過敏さや鈍感さは認めない。

認知：本児の方から学生に関わってくることはない。

ミニカーは車として、絵本は本として扱える。

注意・集中：遊びの持続が短く、他のことや注意がそれやすい。

【目標設定】

長期目標：共同注視、三項関係の確立。

短期目標：意図的伝達手段を拡大する。

【訓練経過・結果】

訓練前期では、本児が届かない高さに玩具を分散したことにより、玩具への指さしが現れた。これを本児の要求の意図の現れとして、指している対象の玩具を学生が都度、本人に確認して手渡すようにした。また、絵本は1分から5分程、スロープトイは3回から10回程と、初回に比べ各遊びが長く続いた。

訓練中期では、本児の視覚優位性を考慮し、シャボン玉遊びを取り入れた。視覚的变化に応じて「みて、

ここ、ふーするよ。」等の聴覚刺激を連動させると、本児が学生とシャボン玉を注視するに至り、学生が「もう一回？」と人差し指を立てると、本児からも同様の指立て動作が出現した。この動作に応じて、遊びを繰り返すやりとりを4回持続した。

訓練後期では、学生が多数のおはじきを投げて散らすという新たな遊びを視覚的に提示した。本児は喜び、上述の指立て動作を示した。これにより遊びを3回繰り返したことに加え、学生の「拾って。」という聴覚刺激および指差しに対しては、本児が自らおはじきを拾い学生に渡すという反応がみられた。このやりとりが4回継続した。また、遊びを選ぶ際に指を差す機会が増えた。

【考察】

本児の場合、視覚刺激を主とした遊びを提示することが遊びへの興味を引き出す為最も効果的であり、また、玩具の分散という環境設定が興味、集中力を持続させるために有効に働いたと考える。その中で、聴覚、触覚刺激を補助的に活用した遊びの提示や学生の共感的なことばかけによる呼応的反応の反復が対人認知に繋がり、学生へ視線を向ける場面が増え、やりとりが生じたと考える。さらに、本児の意図のある伝達手段に対し、学生がその意図を汲み取り応えるという経験を重ねたことで、本児が自身の持つ伝達手段の有効性を実感し、場面に応じた意図的伝達手段が表出されるに至ったと考える。

【まとめ】

対人認知の向上から、やりとりの持続、そして本児の視線・指さし・指立ての意図的伝達手段の表出が増え短期目標は達成したといえる。長期目標については、広がりを見せ始めた意図的伝達手段の般化場面を設定し、有効性の認知をさらに向上させ、共同注視、三項関係を確立させていくことが必要と考える。

【文献】

- 1) 辻あゆみ、高山佳子：自閉症幼児における三項関係の成立過程の分析・シャボン玉遊び場面でのやりとり。発達心理学研究. 3, 2004, 335-344.